

## 被災者でない私が「被災地」に住むと(特集 東日本大震災からの10年、その現実と変容)

著者	上村 静
雑誌名	尚絅学院大学紀要
号	81
ページ	20-23
発行年	2021-07-30
URL	<a href="http://doi.org/10.24511/00000520">http://doi.org/10.24511/00000520</a>

## 被災者でない私が「被災地」に住むと

上 村 静

あの日あの時、吉祥寺で買い物をしていた。大きな揺れがあり、店員がにこやかに「外に出てくださ〜い」という。狭い路上に人が溢れる。遠くの高層ビルが揺れているのが見える。「ガシャン」。ガラスの割れる音。男の人が血を流している。まだ揺れてる。ずいぶん長いな、そう思っているうちにようやく揺れが収まる。買い物をあきらめ家路を急ぐ。途中、古い家の石塀が崩れている。ずいぶんと大きな揺れだったな、そう思いながら自転車をこぐ。家につくと妻が怖がっていた。とはいえ、家の中は何も起きていない。ちょうど引っ越しの準備をしていた。家財はだいたい段ボールに入れてあり、倒れるものもなかった。しばらくすると、都内でいろいろ起きているらしいことが分かってくる。電車が止まってるらしいことや最寄り駅の看板が落ちたといった情報が入ってくる。その日の夜は妻の送別会の予定があったが、妻の友人たちは電車が止まって来られないという。ドタキャンしたら予約したお店に申し訳ないということで、二人で飲みに行く。行く前に駅前で古くなった携帯の機種変更をした。なにか大変なことが起きているらしい雰囲気を感じつつも、美味しい肴と酒をあじわい、ほろ酔い気分で帰路についた。震災は他人事だった。

帰宅してテレビをつけた。すごい映像が流れていた。「なとり」という知らない町に水が入り込んでいた。海から4キロ内陸にまで水が届いたという。4キロという距離感とそこまで水が来ることのイメージが合わなかった。そのことがとても衝撃だった。しかし、翌日からは新たなニュースに心が奪われていった。福島で原発が爆発した。地元の茨城に引っ越し予定だった。わざわざ東京から曝心地に近い方に引っ越しのはためらわれた。けれどももう支払いは済ませてあるし、高齢の親もいる。それまで聞いたこともないシーベルトやベクレルを気にしながらの生活が始まった。震災が少し自分事になった。

研究者としての人生に終止符を打つつもりだった。そのための引っ越しだった。けれど、原発事故とその後の日本政府の対応は、強い憤りをもたらした。そんな中、恩師であり著名な宗教学者である島蘭進先生が、政府や東電や学者の原発事故対応に鋭い批判を展開しはじめた。自分も何かしないといけないように急き立てられた。怒りは物書きの原動力である。それからいくつかの本を出した。中身は以前と変わらず、キリスト教や国家を批判するものだが、少しだけ意識が変わった。それまでは自分のアイデンティティをぼやかしていた。いや、否定したいと思っていた。しかし、これを機に日本人やクリスチャンというアイデンティティをあえて前面に出すようにした。自らの立ち位置を明らかにすることが物書きの責任の負い方だと思うようになった。

その後「尚綱学院」という簡単な漢字なのに名前が読めない大学の公募があるという知らせを受けた。宮城県名取市にあるという。テレビで見た映像がよみがえった。震災から3年、民主党政権から安倍政権へと変わっていた。国家に対する激しい怒りと絶望を感じていた。被災地の学生に会うのは少し怖かったが、この国の現状と世界を知ってもらいたかった。率直に言えば、一人でも多くの学生にこの国から逃げ出してもらおうと思った。2014年の春、被災地に着任した。

仙台のキリスト教系被災者支援組織に昔の教え子がいた。お願いして「被災地ツアー」に連れて行ってもらった。建物が流されて土台だけになった跡地は、イスラエルで見て回った古代遺跡のようだった。荒浜小や大川小学校の話は胸が痛むし、いろいろと思うことはあったが、困惑することはなかった。どうにもならないのは仮設住宅だった。被災者とどう話していいかわからない、何を聞いていいのかわからない、そもそも話を聞いていいものかどうか。物見遊山で来ているだけの人間が、大切なものを失ったからそこにいるに違いない人に興味本位で語りかけることはできなかった。ただただ申し訳ない思いだけを抱えてその場を去った。被災は他人事だった。

\* \* \*

被災地に住んでいると、関東以西の人たちから被災地の様子はどうなのとか、被災者はどうしてるなどと聞かれることがある。「私は被災者ではないので」と逃げるのだが、何かしらを語ることが期待される。ここ数年、関西の研究者たちとの共同研究に参加している。数年前に「被災地ツアー」の企画を依頼された。福島と宮城の被災地を訪問して、話を聞きたいという。いわきで怒りに満ちた話を聞いてから仙台に来た彼らは、私が依頼したボランティアスタッフの話に満足できないようであった。ある参加者は、「よそ者扱いされた」こと、「復興に向けて頑張ってるいい話」が気に入らなかったという。しかし、われわれは「よそ者」でしかない。「よそ者」に被災者一人ひとりの抱える言葉にならない苦悩をだれが語るだろう、だれが代弁できるだろう。彼らはいわきでの話には満足した。原発事故とそれによって引き起こされたその後の問題はよく知られているし、ストーリーとしてわかりやすい。敵がはっきりしている。そのことに被災者が怒りをもって語る。研究者にとって居心地のいい話が聞ける——原発事故によって引き起こされた分断の物語それ自体は真実の一面であるが、しかし「福島」（あるいは Fukushima）といっても被災者一人ひとりによって、その体験も感じ方も異なるはずなのだが。宮城にはそうしたストーリーがあまりない。ないことはない。高すぎる防潮堤の話や震災を機に進められた東北メディカルメガバンクの話など、いわゆる「ショック・ドクトリン」にまつわる話はある。あるいは今後の防災のための教訓を得ることもできるだろう。けれども、そうしたわかりやすい話からこぼれ落ちる小さな物語が無数にある——「小さな」は傍観者の視点であって、当事者にとってはとてつもなく大問題なのだが。それらは、ひとつひとつがそれを体験した人のものであって、それらを束ねて教訓にしたり、国家体制に牙をむくための道具にしたりすることはできない。親しい人にだけ、ポロリと語られるであろう物語は、研究者の自己満足の餌にできない。宮城には Fukushima のようなわかりやすい「敵」はいない。「サバルタンは語ることができるか」（スピヴァク）という言葉の意味が少しわかった気がした。

震災後、宗教学やキリスト教の世界においても、震災・被災に関する著書が多く出された。原発事故については、東京をも被曝させたがゆえに、あるいは政官財学報を巻き込む原子力ムラの存在が（再）発見されたがゆえに、多くのことが語られた。また「被災者によりそう」ということが多く語られるようになり、グリーフ・ケアについての研究も増えた。被災地では、東北大学の宗教学者を中心に「臨床宗教師」という資格が作られた。ボランティアとして多くの宗教者が被災者に話を聞くのはいいが、それぞれの宗教・宗派の立場を出されると被災者が困惑してしまう。そこでそれぞれの宗教色を排した上で被災者とかわることを求めるようになった。また、東北学院大の金菱清ゼミナールの卒業論文集が出版されて話題になった。東北

では震災後に幽霊話が語られているという。そうした話を学生が集めて卒論にする。そこから東北人の死生観が語られるようにもなった。2000年代のスピリチュアル・ブームのころから使われていた「霊性」という言葉に新たな意味が与えられた。「死者の声」を聴こうという人が増え、生者と死者の交流が語られた。

震災を契機に新しいモノの見方が生まれ、新しい研究が進められている。それはいいことだ。被災地内外の人が被災地に来て被災者に話を聞く、そして新しい研究報告書が出され、今後の知見に役立つ、あるいは被災者にとって慰めとなる本が書かれる。素晴らしいことだし、そういう研究のできる研究者をすごいと思う。うらやましいとさえ思う。被災地に住む被災者でない私は、被災を自分事のように代弁することはできないし、まったくの他人事として冷静に分析することもできない。宙ぶらりんな私は、被災地におけるアイデンティティを確立できずにいる。

\* \* \*

尚綱に来て最初のゼミ生は多賀城の出身だった。震災当時の話を聞くと、どう見ても被災者の体験談なのだが、本人は自分は被災者ではないという。どうしてと尋ねると、自分よりひどい体験をした人がいるからと。その後も似たような回答に何度か出くわした。この回答が本心から出たものなのか、聞かれたくない、答えたくないということの婉曲的拒絶なのかかわからない。「被災者」という言葉には、行政による定義はあるのかもしれないが、それを使う人によって幅があるようで、それは震災に対する、またその被害を受けたであろう人々に対する距離感の取り方によってずいぶんと変わるような気がする。

東日本大震災は広範な地域に大きな被害をもたらした。東北3県（福島、宮城、岩手）はもとより、青森、茨城、千葉にも津波は押し寄せ死者を出した。これらに加え、地震による被害として、山形、栃木、群馬、東京、神奈川で死者を出している。3・11の翌日には長野で大きな地震があった。原発事故による被災（低線量被曝）がどこまで広範囲に及んだのか、もはやよくわからない。その後も日本のあちこちで、あるいは世界のあちこちで自然災害は起きている。戦争や人権侵害といった人災による被災も世界中で起きている。「被災者」は世界中に散らばっていて、一人ひとりにそれぞれの体験があり、物語がある。

「被災地」という言葉もあいまいである。かつて災害が起きた土地という意味であれば、たしかに宮城は被災地ではあるが、津波の被害をものに受けた土地、地震で大きな被害を受けた土地、被曝の強い影響を受けた土地、それほどの被害のなかった土地、さまざまである。「復興」なるものがかなり進んだところもあれば、そうでもないところもある。町が「復興」してもその住民の皆がそれを体感しているとは限らないし、いまだ復興は道半ばと言いながら復興目指して邁進する日々に幸福感を覚えている人もいるだろう。「被災者」一人ひとりにそれぞれの体験があるがゆえに、「被災地」もまた人によって今も「被災地」であったり、過去の「被災地」であったりする。いつまでも「被災」と紐づけて語られることを嫌う向きもあるだろう。被災地の人と言っても、毎日毎日、皆が皆、あの日のことだけを思って生きているわけではない。かといって、忘れられるわけでもないだろう。

あの日から10年、今年もまた「被災地を忘れない／で」といった標語が巷に流れた。被災地に住む被災者でない私は、この標語をどの立場で受けとめればいいのかかわからない。よそ者として被災者を忘れないぞと決意を固めるべきなのか、被災地の人間として外部の人に忘れな

いでねとお願いすべきなのか。おそらくまだしばらくはその両方なのだろう。この地に来て7年が過ぎた。相変わらず私はよそ者であるが、それは私がこの地を「被災地」として見ているからなのだろう。いや、事実、よそ者であることに変わりはない。私にとって被災は他人事なのだから。「よそ者」であり続けること、他人事を他人事としたままにその他人事がまだあることを伝えること、そうすることで「被災地を忘れない／で」という責務を担うことが、被災者でない私が被災地に住むせめてもの役割りなのだろう。

## 東日本大震災からの復興 —新潟中越地震、岩手・宮城内陸地震に学ぶ—

水 田 恵 三

図1は、神戸市が阪神淡路大震災から5年目を迎えた2000年に神戸市民に対して「復旧・復興をする中でポイントと思うものは何ですか」を尋ね、1623件の意見を整理したものである。(復興の教科書 oss.sus.u-toyama.ac.jp)。それを重要順に示すと、住まい、人と人とのつながり、まち、そなえ、こことからだ、暮らしむき、行政とのかかわりである。住まいが最重要課題であるが、人と人とのつながりも重要であるとされる。また、まちの復興も必要な要素であり、コミュニティの復興なくして災害からの復興はない。復興とは何かを定義することは難しいが、このような7要因が相互依存的に回復してこそ復興と言える。

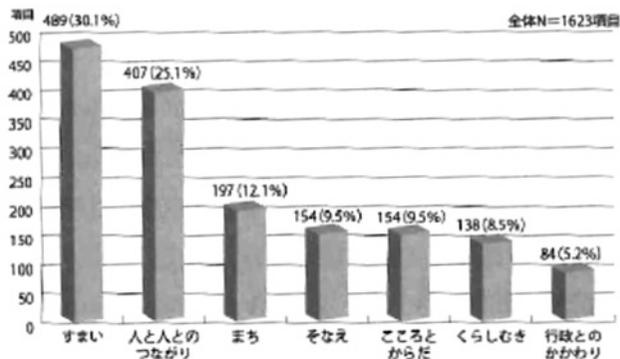


図1 神戸市民が考える復興の構成要素—7つの生活再建課題  
(田村他 2000年より引用)

東日本大震災後10年が近づいた時点で岩手、宮城、福島県、3県において復興を尋ねた調査(\*注)では、1. 地元の復興は順調に進んでいるか 2. こころの復興について 3. 行政への要望について調べている。その結果、復興に関して岩手県、宮城県の人90%近くが復興は順調に進んでいると回答している一方で、福島県では50%しか進んでいないと回答している。福島県においては住まいも定まらない状況では復興を語ることさえ出来ない状況であ